

# 『良人の選定』 紹介

堀 部 功 夫

## 一 佐々木邦の書いた最初の本

鶴見俊輔「佐々木邦の小説にあらわれた哲学思想」（一九四七年二月十日刊『思想の科学』）が冒頭〈佐々木邦の小説わ、莫大な量に達する〉と言うように、邦の書いた本の数は極めて多い。横田順彌『近代日本奇想小説史』（プラールプレス、2011年1月20日）も佐々木邦の〈著作数は調べていないが、翻訳、翻案を含めると、単行本だけで百冊以上あるのではなかろうか〉と報じる。

ではその最初の本は何か。定説に従えば、佐々木邦の書いた最初の本は『法螺男爵旅土産』（明治四十二年四月刊）となろう。岡保生「〔佐々木邦〕年譜」が、邦本のトップにこれを置いた（新版『佐々木邦全集第十巻』）からである。小坂井澄『評伝佐々木邦』（テミス、二〇〇一年七月二十六日）も〈最初の翻訳書『法螺男爵旅土産』〉と書く。岡保生は、以前『近代文学の異端者』（角川書店、昭和五十一年六月三十日）で〈佐々木邦の処女出版は、明治四十二年、彼が二六歳のときに出した『いたづら小僧日記』〉と書いたのを訂正したのである。

\*尾崎秀樹「佐々木邦」（日本近代文学館・小田切進編『日本近代文学大事典』（講談社、昭和五十二年十一月十八日）が「いたづら小僧日記」（明治四十二年五月刊）を邦の〈処女作〉と記したのも、鶴木奎治郎「佐々木邦の表現したアメリカ」（一九八七年三月三十一日刊『千葉大学教養部研究報告』）が〈処女作だった「いたづら小僧日記」〉と言ったのも、加藤政幸「佐々木 邦」（浅井清・佐藤勝編『日本現代小説大事典』（明治書院、平成十六年七月十日））が〈処女作「いたづら小僧日記」〉としたのも、村上文昭『藤村から始まる白金文学誌』（明治学院キリスト教研究所、二〇一一年一月二五日）が「いたづら小僧日記」を〈邦の処女作といえる。つまり文学的出版をした最初の作品〉と書いたのも、みな厳密で無かった。

しかし、『法螺男爵旅土産』より早く刊行された本が存在する。佐々木邦本人の回想、「教壇から創作へ」（昭和十一年十月一日刊『現代』）中の文章、

〔略〕私はその〔明治学院卒業後〕二年間遊んではゐなかつた。自活の為に、翻訳をやつた。代訳だ。五六冊やつた。皆文学書だつたから、実に好い練習になつた。右から左へ出版されるのだから、文章も気をつけなければならない。文

学的素養のない私も売れるか売れないかとなると真剣だ。博打打ちは剣道よりも真剣勝負で鍛へる。正にそれだつた。自分の語彙の不足を感じて、新聞の論説から必要の文字を毎日書き留めた。

を見よ。同文に〈代訳〉の具体的書名を挙げていないけれども、佐々木邦「駆けだし」の頃」(昭和三十九年九月一日刊「本の手帖」)にはそれを挙げている。

〔略〕遊んでもいられないから生計の道を考えた。当時私として曲りなりにも出来るような仕事は英文を邦文に訳すことだつた。〔略〕私の明治学院の先生だつた帝大出の文学士が内外出版から頼まれて来る英書を私に訳させて文学士の肩書で出版してくれる。〔略〕第一回のもは『良人の選択』というので、令嬢がイロイロの候補者を物色する現代小説だつた。〔略〕もし初めての文学的努力が認められ、それが出版されたものを処女作というなら、この『良人の選択』は私の処女作かも知れない。しかし翻訳だから、処女訳だろう。処女作とは呼び難い。と。

だが『良人の選択』と題する本は見つからない。一寸違った『良人の選定』なら有る。『良人の選定』は前後二編。前編袋にも両冊表紙にも両冊扉にも訳者表示が無く、ただ両冊奥付に〈著作者 文学士君の塚守〉と示される。四六判、紙装仮綴。前編、明治三十九年四月二十九日〔国会図書館蔵本は〈五月一日〉と訂正〕発行。扉、凡例ページ1～2、エビグラフ1ページ一丁、はしがきページ1～2、目次ページ1～2、本文ページ1～140、予告1ページ、新刊図書2ページ、奥付1ページ一丁。後編、明治三十九年五月二十七〔国会図書館蔵本は〈二十八日〉と訂正〕発行。遊び一丁、扉、目次ページ1～2、本文ページ141～231、奥付1ページ、新刊図書広告3ページ、の本である。これであろう。

先の代訳回想を、出版社側の記事で確かめる。マンテガッツア原著『良人の選定』の訳者表示を調べると、○佐々木邦訳『いたづら小僧日記』第十版(内外出版協会、明治四十二年九月十五日)巻末「内外出版協会発兌書目」等中に、訳者を〈文学士皆川正禧訳述〉と記す。この訳者表示の『良人の選定』は多分出版されず、広告上だけかも知れない。ところが、○佐々木邦訳述『当世細君気質』(内外出版協会、明治四十三年六月二十日)巻末「内外出版協会発兌書目」中では、『良人の選定』訳者を〈佐々木邦訳述〉と表示する。この訳者表示の『良人の選定』は有るかも知れないし、無いかも知れない。それは未見である。広告上だけかも知れない。また、○佐々木邦訳『いたづら小僧日記』第十三版(内外出版協会、明治四十三年十二月十八日)巻末「内外出版協会発兌書目」中に、『良人の選定』訳者を〈『当世良人氣質』訳者の

旧訳書」と記す。この訳者表示の『良人の選定』も多分出版されず、やはり広告上だけか。『当世良人氣質』訳者）は佐々木邦の謂だから、佐々木邦訳と同意である。

これらの表示からも、『良人の選定』が邦の代訳であり、邦の最初の本と確定できる。『いたづら小僧日記』がヒットしてから、出版社・内外出版協会があわてて『良人の選定』も佐々木邦訳と宣伝し出したわけで、実力が肩書きに勝ったのである。

## 二 名義人は皆川正禧

前記の『いたづら小僧日記』第十版巻末広告で、〈君の塚守〉が皆川正禧とわかった。

皆川なら、『漱石全集』書簡篇で親しい人物である。皆川の経歴は、近藤哲『夏目漱石と門下生・皆川正禧』（二〇〇九年七月十一日、歴史春秋出版）に詳しい。東京帝国大学を卒業した文学士で、明治三十六年より四十一年まで、明治学院高等学部にて英語を教授した。近藤は、① 皆川正禧略年譜〔明治三十九年十一月十八日条〕に、〈夜佐々木来る。〉② 皆川日記〔明治四十年一月十九日条〕に、〈佐々木の訳した悪戯小僧日記を読んだ。細君もまかり出て聞いて居る。大層の評判の中に読み終った。猫よりも滑稽が自然でくすぐりがなくて面白いと云ふ人もあつた。〉③ 皆川正禧略年譜〔明治四十年三月二十四日条〕に、〈佐々木来る。〉④ 皆川正禧略年譜〔明治四十年三月二十五日条〕に、〈午前高田を訪い、小僧日記を依頼する（掲載依頼か?）。〉⑤ 皆川正禧略年譜〔明治四十年四月一日条〕に、〈佐々木来訪。〉とあることを教えてくれる。近藤はこの〈佐々木〉が佐々木邦であることに気付いていないけれども。

近藤の示す②④は、佐々木邦「教壇から創作へ」の記述、

或日、丸善へ行つて、A Bad Boy's Diary という書物を見つけた。買つて帰つて読んで見たら大変面白かつた。私はそれを訳して、代訳の仕事をしてくれる先生に示したら、大層褒めてくれた。先生が何処かへ持つて行つて朗読した。大喝采を博して『報知』の記者が新聞に掲載するといふことだつた。それは前半だつたから、後半を訳して送つたら、記者先生は前半を紛失してゐた。〔略〕や、「駆けだしの頃」の記述、

こんなことをしている間に、私は英語の勉強の爲めに時々丸善へ本を買いに行つた。或時無名氏著 A Bad Boy's Diary というのを見つけて買つて帰つた。大層面白いので前半を訳し、或ところには創作を加えて、先生の御覧に入れた。標題は原名を直訳して、『いたづら小僧日記』とした。先生は褒めてくれたのみ

ならず、仲間の会に持つて行つて朗読した。来合せていた大学の同級生で、『報知新聞』の社会部長をしている人が新聞に連載すると言つて持つて行つたそう  
だ。私は代訳ばかりやつていたが、今度は自分の名で新聞に出ると思つて喜んでいたら、社会部長は原稿を紛失してしまつた。先生に勧められて急いで書いた後半も前半がないから何にもならない。前半から書き直すことも出来るが、社会部長は原稿紛失を理由に問題を打ち切つた。先生は気の毒がつて、後半だけを歌の雑誌「明星」に連載を計らつてくれた。

を、裏付ける。〈仲間の会〉が巴会（皆川日記〔明治四十年一月十九日条〕、未見、近藤本に依る）で、『報知』社員が高田梨雨であつた。上記の他、近藤が内外出版協会・山県との金銭交渉を載せているのも、佐々木邦およびその訳書についての重要な記事であつた。

ちなみに近藤は、内外出版協会刊で〈皆川正禱訳〉と広告される本、・キングスレイ原著『英和对訳希臘勇士譚』・グラント原著『如何にして生活すべき乎』・ヘレン・ケラー原著『わが生涯』・ストロング原著『時勢と青年』・スミス原著『母の道』・ワグネル原著『ワグネル物語』・シアラー原著『淑女の美德』のすべてを、表記通り皆川の訳と扱う。近藤は『英和对訳希臘勇士譚』を、正禱「先師ハーン先生を憶ふ」中の〈此書を日本に紹介したのは実に余が最初〉という記述によって確定した。佐々木邦「駆けだしの頃」に、代訳〈第一回のもは『良人の選定』〉とあるので、それ以前の刊行物『希臘勇士譚』が邦の代訳ではありえない。『淑女の美德』も近藤が正禱の英文日記〔明治四十二年三月二日〕記事によって、正禱訳と確定した。表記上の理由からも、邦の代訳でなかろうと推量できる。したがつて『英和对訳希臘勇士譚』と『淑女の美德』とについては皆川訳説に異論がない。

\*小文字〈ッ〉の促音表記が目立ち、撥音表記のいくつかが〈む〉である、など。促音表記は原稿が〈ッ〉であっても、活字化のさい〈つ〉と改められることがあるから、実態は分かりにくい。皆川の明治三十八年七月十六日付け夏目金之助宛書巻も近藤翻字では〈ッ〉一例・〈つ〉四例と改めるけれども、その影印（平成八年六月刊『木道子』→近藤本 131 ページ）を見ると全部〈ッ〉のようである。つまり、皆川原稿では促音表記〈ッ〉らしい。

だが佐々木邦の回想によつて、他の五冊には佐々木邦翻訳の可能性が残る。「駆けだしの頃」が、〈私はこの一冊〔『良人の選定』〕を手初めに、二年間に五六冊の翻訳を同じ条件の下に果した。〉と、同類が〈五六冊〉あつた旨を記すからである。すなわち、○Robert Grant『The Art of Living』の訳『如何にして生活すべき乎』（三十九年十二月）〔いかにして健全に進歩的にかつ幸福に生活すべきか、を解説する。

ミラー「如何にして家庭を幸福ならしむべきか」を付す。）、○Hellen Keller『The Story of My Life』の訳『わが生涯』（四十年五月）、○Josiah Strong『The Times and Young Men』の訳『時勢と青年』（四十年十一月）、○Hannah Whitall Smith『Child Culture or The Science of Motherhood』の訳『母の道』（四十一年一月）、○『ストーリーズ、フロム、ワグナー』の訳『ワグネル物語』（四十一年四月）〔ワグネル歌劇七編「リエンジ」「幽霊船」「歌客タンホイゼ」「歌曲の長」「鴿の武士」「王妃の嘆き」「呪詛の指輪」の梗概を物語風に綴ったものに、「ワグネルと其著作」を付す〕、は、邦による代訳の可能性がある。後考を俟つ。

### 三 原本

さて『良人の選定』である。前編袋（此の書の原本は今日欧米諸国に於て盛に其の国々の語に訳せられ好評噴々たるものにして伊太利人 PAOLO MANTEGAZZA の名著なり今之を邦語に訳し前後二編に分ちて発行す〔前編目次略〕訳者は此の書が多く未だ結婚せざる女子并に其の父たり母たり兄たり姉たる方々に読まれんことを望む）。『凡例』に、〈一、此の書、原本は“The Art Choosing a Hasband”と題し、其の姉妹書なる“The Art of Taking Wife”（細君の選定）と共に、汎く欧米の家庭に愛読せらる、有名の好著なり。原著者は伊太利人 Paolo Mantegazza にして其の英訳本は既に我邦にも輸入せられ丸善、教文館等に於て多く売捌かる、を見たり。〔改行〕一、此の書、全篇を三部に分ち、第一部は物語、第二部は父の遺訓、第三部は其結論なり、今先づ其の物語と父の遺訓の一部分とを翻訳し、前編として発行す。されど、本書著述の趣旨は、専ら其後編（前編奥付の裏面に其の目次を挙ぐ）に存りて、本書が真面目なる教訓書たるの価値も、亦全くこゝに存するものと知るべし。〔改行〕一、『細君の選定』は、既に其の翻訳を了りたれば、引続き発行すべく、二者相俟ちて、聊か今日の軽率浮薄なる結婚の悪弊を矯正するに少補あるべきを信ず。〔改行〕明治三十九年四月）と解題する。次に原著者の言葉、

辛抱弱い美姓のかたへへ、〔改行〕もう早くと急つて居給ふ方へ、〔改行〕余り實際的におはして、お錢と頸飾が充分新家庭の幸福を造り得ると心得なさる方々へ、〔改行〕余り詩的におはして恋愛が結婚唯一の要件と空想なさる方々へ、〔改行〕其方々へ、此の一本を献じまして、〔改行〕結婚はまことに人生の最大幸福をもたらすもの、なると同時に、此ものは最も遊離れ易き化合物である、最も脆い最も複雑ツた、そして最も細心の注意を以て取扱ふべき器械のやうのもの

であることを教示したい希望であります。

があり、「はしがき」に、〈此書、一国手が其愛女に遺書するに擬して、あらゆる階級の男子と、あらゆる男子の性質、癖難とを説く奇警詳密しかも其述ぶる所真摯、一に世の可憐の子女をして、抱りて以て良人の選定を誤らしめざるにあるもの、固より坊間往々見るが如き卑猥厭ふべきものと其撰を異にせり、国手が所謂『女兒には総てを知らしむるを要す』なる語の、現今我が新社会に於て殊に然るを信ずるが故に、今此を邦語に訳して普く天下の女子に頒つ願ふは修飾多き男性に対する試金石にして照魔の明鏡たれ。〔改行〕三月下旬〔改行〕東京に於て〔改行〕訳者識〕と翻訳意図を記す。

＊「凡例」に〈引続き発行〉とうたわれた〈『細君の選定』〉は、宮地竹峯翻訳『細君の選び方』として、大正二年十一月七日、内外出版協会より出版される。

原著者 Paolo Mantegazza の著書は多い。夏目漱石『文学論』や森鷗外「月草」叙にも引用され、漱石文庫は Physiognomy and Expression (1890) を所蔵。他にエリス『性の心理学的研究』に〈マンテガッツァは、五十年間にわたって幾多の著書を刊行したが〉として〈その著『快樂の生理学』〉や〈最近の著『女性の生理学』〉が引用され（『世界性学全集第一巻』〔河出書房、一九五六年九月二十日〕九六～九七ページ）、『小酒井不木全集第一巻』〔改造社、昭和四年六月二十日〕所収「殺人論」三八ページに〈マンテガッツァは女性の賛美者であつたが、その著「女性の生理」の中には〉云々と載る。『クオレ』を書いたアミーチスの友人で、『続愛の学校』という創作もある。三浦関造が訳しており（誠文社、昭和二年十一月八日）、本作と通じるところがある。

『良人の選定』の底本は、GABRIEL CLAUDE CHARTON による英訳本『THE ART OF CHOOSINING A HUSBAND』（GAY AND BIRD, 1904）であろう。

双方の本文目次を写す。訳書では「良人の職業」からが後編に当る。

底本	訳本
PART I [THE STORY (1)]	巻の一〔物語 (1)〕
I. THE DAWN OF WOMANHOOD (1)	一 芳紀 (1)
II. BOOKS AND FANCIES — DREAMS AND REALITY (9)	二 書物と空想 夢と実 (8)
III. FIRST LOVE (24)	三 初恋 (20)
IV. THE CORRESPONDENCE — TWO OTHER ASPIRANTS FOR SILVIA'S AFFECTIONS APPEAR ON THE HORIZON (49)	四 娘一人に婿三人 (39)

V. THE DILEMMA, OR RATHER TRILEMMA: SILVIA HOLDS CONFABS WITH HER MOTHER AND A FRIEND (70)	五 どうしたものか (54)
PART II (HER FATHER'S MANUSCRIPT (89))	巻の二〔父の遺書 (71)〕
I. HER FATHER'S ADVICE TO HIS DAUGHTER ON HER CHOICE OF A HASBAND (89)	如何にして良人を選定すべきか (71)
TYRANTS (95)	一 圧制家 (76)
MILKSOPS (105)	二 困窮家 (84)
OTHELLOS (118)	三 嫉妬家 (94)
GRUMBLERS (129)	四 不平家 (100)
MISERS (139)	五 吝嗇家 (107)
PROFLIGATES (150)	六 放蕩家 (115)
FOOLS (161)	七 愚人 (124)
DO-NOTHINGS (IDLER) (172)	八 怠惰家 (131)
II. PROFESSIONS VIEWED IN THE LIGHT OF THEIR INFLUENCE ON HAPPINES IN MARRIAGE (185)	良人の職業 (141)
THE BUSINESS MAN AS A HUSBAND (195)	一 良人としての実業家 (148)
THE BANKER AS A HUSBAND (201)	二 良人としての銀行家 (151)
THE MANUFACTURER AS A HUSBAND (209)	三 良人としての製造業者 (155)
THE LANDOWNER AS A HUSBAND (212)	四 良人としての地主 (157)
THE ARTIST AS A HUSBAND (216)	五 良人としての美術家 (160)
THE ENGINEER AS A HUSBAND (220)	六 良人としての技師 (162)
THE DOCTOR AS A HUSBAND (223)	七 良人としての医師 (165)
THE LAWYER AS A HUSBAND (231)	八 良人としての弁護士 (171)
THE LITERARY MAN AS A HUSBAND (237)	九 良人としての文学者 (174)
THE SCIENTIST A A HUSBAND (242)	一〇 良人としての科学者 (178)
THE POLITICIAN AS A HUSBAND (248)	一一 良人としての政治家 (182)
THE SOLDIER AS A HUSBAND (253)	一二 良人としての軍人 (191)
III. A FATHER'S FUTHER ADVICE TO HIS DOGHTER ON HER CHOICE OF A HUSBAND (259)	更に良人の選定に就いて (191)
IV. FRAGMENTS FROM A CODE OF DOMESTIC DIPLOMACY (284)	家庭外交術 (211)
PART III {CONCLUSION OF THE STORY (321)}	巻の三〔物語の完結 (230)〕

と、ピッタリ対応する。

作品は分量的に、父の遺書が中心で、小説的部分——シルビヤ物語、成人したシルビヤが、初めて医学生・エドウィンに恋情を感じる。一方、若い技師・リノルデニと、六十歳の金満家・アカフレダとの二人からも求婚される。折りも折り、シルビヤの父なる医師が急逝した。残された「良人選定についての父の勧告書」を、シ

ルビヤは読む。熟考して、リノルデニを選び幸福になる——は四分の一程度である。

#### 冒頭部

It was a glorious March morning, and the sun, impatient, had risen betimes, scattering through the azure and already sultry air a shower of golden, growing rays.

Not far from Silvia's house stood the railway-station, and she had walked there to wish "God-speed" to an engineer cousin, a bridegroom only a month married, but now compelled at the stern call of duty to leave home and bride and undertake a long journey alone.

を、邦は、

気早な太陽は最早疾に昇つて、うそろ温い晴れ渡つた空から、黄金の光を雨と蒔き散らして居られる、春三月の或朝の事で。〔改行〕シルビヤの家から程遠からぬ所に、鉄道の停車場がある。今日は従兄が出発するといふので、彼女は見送りのために、今此停車場へ駆付けたところである。従兄といふのは技師で、つい一月以前に結婚したばかりであつたが、仕事の都合で、已を得ず、出来たての家庭を後にし、可愛い新夫人を残して、孤影飄然、今此の長い旅路に上る身である。

と訳す。

#### 最後部

Silvia, after hearing her friend's advice, and after reading and re-reading her father's manuscript, often bathing it with her tears, married the engineer Rinaldini.

And I, who know her well, can also tell you that she did wisely, for she is very happy, and her happiness is of the kind which endures to the last breath of life.

を、邦は、

シルビヤは、友人の忠言を聞き、更に父の遺書を再読三読して、屢ば涙を流した後、技師リノルデニと婚を結むだ。彼女の選定は真に賢明であつたと謂はねばならぬ。今彼女は真に幸福である、そして其幸福や一生続く性質のものである。

と訳す。

原本に忠実な翻訳らしく窺える。段落も、ごく稀に邦が概括する場合を除き、大



体対応する。なお邦は段落頭の一字下げをしない。原文中イタリック体の語は、訳語の後に感嘆符〈!〉を付すなど、きめ細かい。

『良人の選定』は、Mantegazza 移入史の第一ページをなす。

#### 四 邦本は藤澤衛彦に盗まれる

邦<sup>くに</sup>翻訳本の享受例として、すこし特殊ケースながら、ポール・マンテガッツア著・藤澤衛彦訳『良人の選定』（コスモポリタン社、昭和二十四年三月一日）を挙げよう。

藤澤本は、附録の「花言葉」のみ、John Ingram の Language of Flowers を利用したと断る。本体である、邦<sup>くに</sup>翻訳の『良人の選定』についての言及・断りは一切ない。あくまでポール・マンテガッツア著を新たに訳した体裁で、白を切っている。

けれども実態は、邦<sup>くに</sup>翻訳『良人の選定』を下敷きに、若干の改変・付加を添えただけの代物であった。

例えば、原文の

Six months elapsed, and things had got to this pass: he knew that he was loved, she felt certain of his deep devotion, and, naturally, each was conscious of being in love. (p.32)

を、邦は、

こんな風で、半年経つた。事の経過は如何。エドウィンは自分が慕はれてゐると知つた。シルビヤもエドウィンが熱度の程を確めた。そこで我々は惚れ合つてゐるのだ、磯の鮑でない事実だけは分つた。(前編二十六ページ)

と訳す。〈磯の鮑〉云々の付加に注意したい。藤澤本のこの箇所は、

こんな風で半年ほど経つた。事のなりゆきはというと、エドウィンは、窓の観察から、いつからともなく、シルビヤに自分が慕われていると感じた。シルビヤもまた、自然とエドウィンの愛の熱度のほどをたしかめた。そこでおたがいは、おもいあつているのだ。片思いではないということを知つた。(二十九～三十ページ)

で邦付加相当文が有り、藤澤が邦本を底本にしたと窺える。

藤澤本の目次を再掲しつつ、コメントを加え、藤澤衛彦の杜撰を明らかにしたい。「はしがき [藤澤新稿]」「目次」のあと、

利用された邦本	藤澤本
前編第二十～二十一ページ	第一篇 物語のはじめ (11)
前編第三・二十二～六十九ページ	第二篇 シルビヤ物語 (19)
	第三篇 父の遺書 (75、見出しのみ)
前編第七十一～七十四ページ	如何にして良人を選択すべきか (75)
前編第七十四～七十五ページ	よい良人 (77)
前編第七十六ページ	わるい良人 (78)
前編第七十六～八十三ページ	一、圧制家 (79)
前編第八十四～九十四ページ	二、因循家 (84)
前編第九十四～九十八ページ	三、嫉妬家 (96)
前編第百～百七ページ	四、不平家 (99)
前編第百七～百十五ページ	五、吝嗇家 (105)
前編第百十五～百二十四ページ	六、放蕩家 (110)
前編第百三十一～百三十九ページ	七、怠惰家 (118)
前編第百二十四～百三十ページ	八、愚人 (126)
後編第百四十四～百四十八ページ	良人の職業 (135)
後編第百四十八～百五十ページ	一、良人としての実業家 (138)
後編第百五十一～百五十五ページ	二、良人としての銀行家 (141)
後編第百五十五～百五十七ページ	三、良人としての製造家 (145)
後編第百五十七～百五十九ページ	四、良人としての農業者 (147)
後編第百六十～百六十二ページ	五、良人としての美術家 (149)
[ナシ]	六、良人としての文学者 (152、見出しのみ)
後編第百七十四～百七十八ページ	七、良人としての音楽家 (152)
後編第百八十二～百八十六ページ	八、良人としての政治家 (156)
後編第百六十二～百六十四ページ	九、良人としての技師 (160)
後編第百七十八～百八十二ページ	十、良人としての科学者 (162)
後編第百七十一～百七十四ページ	十一、良人としての弁護士 (166)
後編第百六十五～百七十ページ	十二、良人としての医師 (169)
[ナシ]	十三、良人としての勤労者・労働者 (175)
後編第百九十一～二百十ページ	第四篇 良人の選定 (177)
後編第二百十一～二百二十九ページ	第五篇 家庭の幸福 (195)
後編第二百三十ページ	物語のむすび (209)
[ナシ]	附録 花言葉 (213)

と対応する。

藤澤本の大きな改変は、「良人としての軍人」節が消えて、「良人としての勤労者・労働者」節が登場したことであろう。

わが娘よ、もちろんお前は、独立の生業を持つ男を良人として選ぶでしょう。

〔改行〕お前の教育、お前の教養の程度から考えて、お前が、きつと、いわゆる自由職業を持つ男性を良人に持つであろうことは、疑いのないことと思います。〔改行〕しかし、その男が、どんなに金持でも、怠惰な無職者であつてはなりません。〔改行〕怠惰な無職者やならず者が、国の処女のけっこんの対照となるようだつたら、国の壊滅は、もはや、必至の運命にたちいたつたといつていいでしょう。〔改行〕人間として働くことを楽しませる根本動機は、私には身体の維持、公には国家の維持に対する必要からであります。〔改行〕無職者、ならず者に嫁ぐ女性より、勤労者、労働者を良人に持つ女性の方が、どんなに見上げたねうちのあるものであるかわかりません。

と。これは藤澤の新稿か。独自の主張があるわけでは無いが、いかにも戦後日本向け改定である。民俗学者・児童文藝研究者として著名な藤澤に、かかる拙速盗作類のあったと知って驚く。ただ藤澤本が、別の見方をすれば佐々木邦訳本の存在意義・有効性を裏書するということではできであろう。

## 五 邦は尾崎紅葉に学んだ

邦は、翻訳時に、尾崎紅葉の著作を指針にした、という。「教壇から創作へ」に尚ほ紅葉山人の言文一致を熟読して、調子を覚えることに務めた。私は今でも紅葉山人を師と仰いでゐる。

と書き、「駆けだしの頃」にも、

先生がいい知恵を授けてくれた。日本文としては手紙と作文しか書いたことのないものが小説を訳すのは無理だから、先ず日本文を習わなければいけない。それには言文一致の傑作を暗記するくらい熟読する。絶えずお手本を見ながら、英文を日本語で考える。屹度小説らしい文章が出るというのだった。私はこの教示に従つて、紅葉山人の『隣りの女』というのをお手本に選んだ。小説として読むのでない。書き方を学んでそれに近い文章を出そうという泥縄式の努力だ。読んで行くに従つて、私は紅葉山人の文章のうまいのに驚いた。本当にいい先生を選び当てたと思つた。読んで学びながら訳を進めて行く。

と明言する。

『隣の女』ときけば、『良人の選定』冒頭が〴〵向かいの男。物語であつたと気づく。シルビヤは、〈向家〉二階へ〈越して来た〉エドウィンに初めて恋をする。

小説を読むで、態々の空想を描いてゐたシルビヤは、今エドウィンを其空想の

目的物とした。彼女は未だ言葉を交した事がない、遠耳にも其声を聞いた事のない向家の若者を恋し始めたのである。(25 頁)

この部分、原書は、

And Edwin became the tangible object of all Silvia's hitherto vague aspirations and dreams; without having, even at a distance, heard the sound of his voice, in him she sought the man. (p.30)

である。邦の付加〈小説を読むで〉が、『隣の女』の、

臥ながら天井を眺めて、時々気の無い大息を吐いて、多時空想を描いて、人情中本の円満なる好男子の身上を憶起して、そこで我身がいとゝ果敢なくなつて、巡査をしても可から、隣の女のやうなのに可愛がられて、仕送られて、意気な苦勞をして面白く暮して見たいなど、考える。

の下線部から来たかもしれない。

エドウィンからラブレターが届く。

何であらうか。シルビヤは其を手に執るに先立つて、此無害の爆裂弾を投げ込むだ可愛い曲者を見届けやうと、直ぐ窓へ走つて行つたが、晚い、犯人は逸疾く影を隠した。(35 頁)

この部分、原書は、

Before picking it up, Silvia ran to the window, hoping to confront the thrower of this harmless projectile. But no, he was already out of sight. (p.43)

である。邦の付加文〈何であらうか〉が、『隣の女』の、

何か投げたなど視ると、萩の花の一面に散敷いた上に、紙を結びつけた銀簪が横はつてゐる。扱はと顔を挙げるとはや美人の影は無い。

の下線部から来たかもしれない。

また、

そこで彼女は其包を手にした。が、さて奈何したものか。彼女は競々してゐる。

この部分、原書は、

Then she pounced on the packet, but slowly-very slowly-opened it. (p.43)

である。邦の付加〈彼女は競々してゐる〉が、『隣の女』の、

譲は跣足で駆下りて、引攫ふやうに拾つて来て、ぶる――顛ひながら、其紙を解いて披げると

の下線部から来たかもしれない。

次に、文体上の影響を列挙する。

第一に、紅葉の〈である〉調を、邦が採用したのは言うまでもない。文末の現在形も、同様である。

第二に、〈で〉止め。

〔略〕忍男なら垣の外でエヘン――を極める格で。(紅葉十)

〔略〕春三月の或朝の事で。(邦前編第一ページ本文第二行目)

第三に、体言止め。

然矣、破鍋に綴蓋！(紅葉三)

長い接吻、離苦の歎歎！(邦前編第三ページ第九行目)

第四に、反復体言止め。

〔略〕鈍福！鈍福！(紅葉八)

〔略〕危険！危険！(邦前編第四十一ページ第十行目)

第五に、文語文交じり。

〔略〕豈所帯染ざらむと欲すといへども得可けむやで、〔略〕(紅葉一)

呆れざらんと欲するも豈得べけんやである。(邦前編第五十一ページ第八行目)

第六に、用字。

<sup>さすが</sup>有繫に(紅葉三)

<sup>さすが</sup>有繫に(邦前編第三十二ページ第八行目)

等々、端々に紅葉文体の影響は顕著であった。『良人の選定』の底本は“The Art Choosing a Hasband”であるけれども、外に訳文成立へいくつかヒントを与えたのが『隣の女』であった。

## 六 『隣の女』から笑いの文学へ

「隣の女」は、〈小夜といふ外妾が誤つて情夫を殺し其の死骸の始末に困りしより、隣家に下宿したる粕壁譲といふ不男を色を以ておびき寄せ死骸を隅田川に投ぜしむ、譲竟に思ひせまり入水して死すといふ筋にて、ゾラが端篇の翻案なりといふ文章は山人独得の軽妙なる言文一致なり〉(南強生「『現世相』と『隣の女』」[明治26年10月13日刊『早稲田文学』])と概括される作品である。

紅葉は、春水本主人公気取りの醜男を笑う描写を増加し、貴族の令嬢を妾と変え、令嬢の遺伝的問題を捨象し、結末で男の自殺過程を省略した。原作の末尾近く、ゾラ同一原作の別訳「恐ろしき一夜」で引けば、

〔略〕彼の恋は漸次消えて、『死』の呼吸が強く吹いて居るのである、〔略〕小川はその顔を現して、幾度か笑ひながら、だん―拡がつて行く。田舎は漸次静かになつて行くのに、珊瑚暮河はその音楽の如き緩やかなる調子を増して行く。百合は三度照子の名を呟いた。そして恰度死骸のやうに、大きな飛沫を立てゝ、水の中へと躍り込んだ。が、珊瑚暮河は前と同じやうに、草の中でその歌を続けて居る。(松居松葉訳〔明治三十六年十一月三日刊『文藝界』])

という箇所を紅葉は削除した。

南強生が〈吾人は譲が其犯後の苦悶にこそ作者定めて腕を見するならんと思ひしに、左はあらで事実を曖昧の中に没了し「二日目の朝死骸が流れつきし」にて一切を済まされしお手軽には驚きたり、これでよい悲劇がタワイない喜劇となつてしまふたり〉と引導をわたす。ゾラを指標とした批評で、以下を牽引する。風潭「隣の女」(明治二十七年七月三十日刊『文学界』)も、作中人物の衣裳等の描写の生彩を〈これ紅葉子が獨得の技なるべし。されどその奥にひそむ人間の胡念乱思、煩悶痛苦の内象に至りては、〔略〕未だ一指を触れざるならむか〉と記す。一方、撫象「隣の女」(明治二十七年八月四日刊『女学雑誌』)は、結末を他殺と読み、紅葉の改変を積極的に評価した。

島本晴雄「紅葉作「隣の女」の系図」(昭和三十三年四月一日刊『比較文学』)が、〈原作と翻案との差異でまず著しいのは、自然主義的病理方面と死体遺棄の犯罪小説的部分、つまりゾラらしい暗黒要素を紅葉は全く省略し、あくまで軽妙な市井風俗の物語としたことである。〉とまとめたのは有名である。成瀬正勝「明治中期翻案小説に関する一考察」(昭和三十七年二月二十八日刊『人文科学科紀要』)も、紅葉のゾラ理解の限界を確かめる。土佐亨「『寒帷子』作者考」(昭和四十七年八月三十日刊『近代文学研究』)は、撫象評の展開で後述する。木谷喜美枝「尾崎紅葉における言文一致」(昭和五十三年十二月二十日刊『和洋国文研究』)が結末の切捨てを〈人間の最終的な弱さ〉に紅葉が〈関心がなかったのか、あるいは〔略〕言文一致体の試みに疲れた結果か〉と述べるが、後の理由は分かりにくい。富田仁「フランス小説移入考」(東京書籍、昭和五十六年三月二十七日)は島本説に近い。〈紅葉はゾラの小説のもつ暗さ、つまり、遺伝的な<sup>マ</sup>恋態愛欲、サディズムが犯罪を生んだという面には興味を示さず、一篇をいかにも軽妙な市井風俗の物語に仕立てたのであり、粕壁譲を平凡な青年に描いているところに作者の独創性が認められるのである〉と評す。杉井和子「紅葉の翻案と笑い」(ハワード・ヒベット+文学と笑い研究会編『笑い創造第三集』〔勉誠出版、平成十五年二月十日〕)は〈紅葉が、ゾラの原作に

あった環境と本能によって形成される人間の悲劇を大きくずらし、三面記事をネタにした笑いに富んだ小説へと変えたものは会話体を生かした風俗描写である」と論じた。柏木隆雄「ゾラ、紅葉、荷風」(小倉孝誠・宮下志朗編『ゾラの可能性』(藤原書店、二〇〇五年六月三〇日)が「ゾラの作品の眼目の一つである、女の愛人に対するサディズムの病理の克明な描写と、そのおぞましい結末の微細にわたるレアリスムは、紅葉において捨象され、女の嬌として艶に、しかも冷酷な様と、それに振り回される男の滑稽なまでの哀れさを描くことに力が注がれている。」も島本説の敷衍である。酒井美紀『尾崎紅葉と翻案』(花書院、二〇一〇年三月十日)が、結末の相違点を「小説としてのまとまりの方がより重要だと考えていた」ためと説明する。

近年ようやく「隣の女」の〈笑い〉〈滑稽〉が注目を集めるようになった。

もう一度、原作の末尾近くでの省略に立戻る。土佐亨は「この省略(?)こそ一作の眼目であり、紅葉の意図するところであったと考えられるのである。紅葉独自の翻案がまさにここに存するのである」と報じた。土佐のこの言は首肯できる。ただし同時に、土佐が事件の真相を、

譲の死は自殺などではありえず、証拠を湮滅して完全犯罪を企む小夜が、譲のあとをつけて川へ突き落とすなどの何らかの手段によって謀殺したものであることを紅葉は匂わせているのだ。

と解く点は、如何であろう。土佐解は、『隣の女』を探偵小説の型へ当てはめ、けりをつけてしまった。勝手に小夜を毒婦視する読み方は、撫象ゆずり、土佐の言うように「探偵小説の常道」であった。

だが、紅葉は通俗的探偵小説に批判的だったのではないか。土佐も紅葉が黒岩涙香に「反ばつを感ずる」と記していた。ならば、紅葉が「探偵小説の常道」へ書き換えたとは考え難い。粋は深みに嵌まることを忌諱する。けだし他殺説はミスリードだろう。一旦謀殺と予想させて、それをわざと外し、すれっからしの探偵小説読者を笑う。そんな描法と採る方が、紅葉のライト・タッチにふさわしい。第一、譲の呆然自失死は少しも否定されていないから、事件の真相を小夜による謀殺と読む必要は無い。現に成瀬正勝も富田仁も柏木隆雄も『隣の女』の結末をそう採っていない。私は、典型的に犯人を当てる早呑込読者をキリキリ舞いさせようとした探偵小説退治の元締め・紅葉を想定したい。

\*成瀬が「投身自殺」(前記論文七〇ページ)、富田も「自殺」(前掲書一〇七ページ)、柏木も「ゾラと日本」(川戸道昭・榎原貴教編著『図説翻訳文学総合事典第五巻』[大

空社・ナダ出版センター、二〇〇九年十一月二十四日)) 二四〇ページで〈自らも死ぬ羽目になる〉と読む。

松葉訳「恐ろしき一夜」が掲載されて以後は両者の相違も容易となり、ユーモア小説好きが私解同様の紅葉理解をした可能性はあろう。

それは、大人をてんでこ舞いさせる子供の悪戯に似る。

DEAR diry, did you know Lizzie fell into the cistern yesterday? Suth a holring an screming all over the house an people running to get her out fore she was drowneded, an Johnny's father's hired man coming over in a hurry with a ladder, you never seel He put the ladder down an fished her out and brung her up, an Bess she cot hold of her, an mamma was a screming to Betty an Cook to warm some blankets, cause she was so driping wet, an took the poor child away from Bess-and, after all, they found they need knot have been in such a hurry-it was not Lizzie after all, but a false girl I made an thru in, -I got Lizzie to lie lo behind the woodshed wile I throwed it in an yelled "O, O, O, she'l be drowneded-O poor Lib." So then they came and saw the dummy in the cistern, and began to make the offlust fuss. It was real unjust of papa to send me to my room without my supper, gust cause folks don't know a false girl when they see her. I never said she was in the cistern-I only said "Poor Lib, Oi Oi"〔日記さん、お前は昨日リジーさんが水溜に落ちたのを知つてゐるかい。家中は泣くやら叫くやら大騒ぎ、みんなは溺死しない内に助けようと飛んで行くし、ジョンニーのお父さんの雇人は梯子を持って駆けつけるし、その騒ぎつたら有りやしない。梯子を下して、リジーさんを釣ると上がつて来た、ベス姉さんが受取つてやる、お母さんはベチーとおさんにリジーちゃんを濡鼠だから早く毛布を持って来て温めろと怒鳴る、可愛さうに赤坊まで側杖喰つてベス姉さんから投げ出されると云ふ始末だ——そして最後には何もさう狼狽てるには及ばなかつたのが分つた——落ちたのはリジーちゃんでも何でも有りやしない、僕が身代りの娘を作つて投げ込んだのだ——僕はリジーちゃんを物置の後ろに隠して置いて、人形を投げ込むと、『大変だー、リ、リ、リ……落ちたよ!』と怒鳴つてやつたもんだから、みんなが飛んで来て、薄暗い水溜を覗き込むと、この騒ぎになつちやつたのだ。飯も食はずに部屋に閉込むなんてお父さんも不穩当だ、よく真相を極めて人形か人間か見ないから悪いのだ。僕は決してリジーち



やんが落ちたと云ひやしなかつた筈だ、たゞ「り、り、り……落ちたよ！」と云つた切りだ。（伊東六郎訳）

に通じる。人騒がせな悪戯だが、ユーモア小説好みなら笑える場面であろう。

邦がこの洋書に接すれば、同類の笑いを洩らしたはずである。そこから、この洋書を元に、

今日はお客に來た綾子さんといふ小さい女の子が大瓶へ落ち込むで大騒ぎだつた。料理人が梯子を掛けて引つ張り上げると、綾子さんのお母さんは狂人のやうになつて、雫の滴れてゐる綾子さんを抱き占めた。お母さんは早く毛布を温めませんかと、お歌姉さんを叱りつけた。お島の狼狽者は近所へ医者を呼びに駆けて行つたけれども、考へて見れば結局那麼騒ぎを入れる必要は些つともなかつたのである。瓶へ落ちたのは綾子さんぢやない、乃公が拵へた藁人形だ。乃公だつて若し眞正の綾子さんが落ちたのなら司馬溫公のやうに瓶を破つて助ける位の事は心得てゐる。唯あゝ、つて言つてゐるものか。乃公は眞正の綾子さんを物置の中へ置いて置いて、嘘の綾子さんを、投り込み、唯、あゝ、彼の子が落ちた、彼の子が落ちたと大きな声を出したばかりだ。すると皆は盜賊でも見つけたやうに総出になつて那麼空騒ぎをしたのだ、料理人さへ梯子を掛けて漸つとの事で登つた所へ、那麼小さい女の子が独りで登れるか否か少しは物の道理を考へて見るが宜い。皆が馬鹿で綾子さんと人形の區別がつかないばかりに、乃公は晩飯も喰べないで室へ閉ぢ込められてゐる。乃公は決して綾子さんが落ちたとは言はなかつた。

と書き換えに向かうのは一直線である。邦翻案の「いたづら小僧日記」出現も間近い。

（ほりべ いさお／本学非常勤講師）